

シンポジウム

「ドイツ語圏のミンゾク文化」からの発見

国際日本学部 国際文化交流学科1年 具志堅 聖佳



前半の3名の講師による講演の様子

2022年11月28日、みなとみらいキャンパスで開催された神奈川大学人文学会主催シンポジウム「ドイツ語圏のミンゾク文化―交差する人・モノ・情報が生む世界」に参加しました。登壇者は、角南総一郎先生（国際日本学部歴史民俗学科）、角山朋子先生（同国際文化交流学科）、山田香織先生（東洋大学社会学部国際社会学科）の3名でした。

今回のシンポジウムでは、角南先生から民俗学的な立場でのドイツ語圏の文化について学ぶとともに、意外と身近にドイツ文化に触れることができる施設があふれていることを知ることができました。角山先生からは、ドイツ以外のドイツ語圏であるオーストリアの美術の国際的な展開から、日本との意外なかわりについて知りました。個人的には角山先生の講義パートでは、ほかの講義でも共通の問いになる「〇〇文化」とは何かについても考えることができ、身になる講義でした。また、今回の特別ゲストである東洋大学の山田先生の講義パートは、現代のドイツ南部、アルトバイエルン地方の集落ごとの文化である「マイバウム」に焦点を当てたものであり、そこから表現・

鑑賞の日常性と意味を学ぶことができました。

講義の質疑応答で、ある生徒が「既視感がある」と発言していたのですが、実は私自身も「マイバウム」に既視感がありました。まず、「マイバウム」とは南ドイツのアルトバイエルン地方で集落ごとに見られる30〜40メートルほどある大きな木製の棒で、青と白の色合いと、各集落で行われている、あるいは行われていた職業を表した装飾が特徴的です。名の通り、「五月の木」(Mai-Baum)といいい、5年ごとに新しいものを5月1日に設置します。これを集落ごとに未婚の男性のみですべて行います。

それに対して私が既視感を覚えたのは、母の地元である沖縄県糸満市大里で行われる、集落内対抗（集落内で、西イリーに家があるチームと、東イリーに家があるチームに分かれる）の綱引きの際にみられる「旗頭」（ウチナー口で「はたむちャー」＝「旗を持つ人」というものです。こちらは一見ヤシの木の様に見える、3〜4メートルほどの数人を持ち運びが可能なものであり、先端に丸いチームを表す装飾とその下に葉っぱのような装飾があり、さらにその下に弓矢のような装

飾があります。この旗頭は綱引きが終われば片づけてしまったためマイバウムとは似つかない部分が多いと思いますが、一見した時の見た目と「青年会のような立場の人たちによって作成・設置される。」という部分で既視感がありました。こちら、各陣営の青年会（こちらは既婚者でも可能）によって制作されます。

今回のシンポジウムを通して私は、ドイツ語圏の文化について触れることはもちろんのこと、「文化」とは何かについてあらためて考え、自分が生まれ育った土地の伝統行事と似ている部分・関連している部分を見出すことで、身近に他の文化を感じることができ、より異文化理解が深まることを実感しました。私の地元の文化について考えや理解をさらに深めることができ、新たな面白さなどを見つけることができた点で、私にとってとても身になり興味深いシンポジウムでした。



後半の会場とセッションの様子